

TOPICS

平成15年度 地域農業確立総合研究 「寒冷地におけるイチゴの周年供給システムの確立」 現地推進会議

総合研究部総合研究第3チーム 今田成雄
IMADA, Shigeo

国内での一般的なイチゴ栽培では、収穫は晩秋から始まり翌春まで行われ、端境期の7月から10月には国産イチゴの生産が極めて少なくなります。私たちはどの季節でもイチゴのショートケーキを食べていますが、その端境期に食べるケーキのイチゴはほとんどがアメリカからの輸入イチゴです。輸入イチゴは味も、見た目も良くないことから、市場やケーキ業界の関係者からは、夏秋期のおいしい国産イチゴの供給が強く望まれています。

そこで、東北地域の夏季冷涼な気候を活用して夏秋どりの新作型を開発し、東北地域でイチゴの周年供給産地化を図ることを目標として、今年度から5年間、東北農業研究センターが中心となり、東北6県の協力のもとに地域農業確立総合研究に取り組むことになりました。

本プロジェクトの開始に当たり、今年6月26日にJ A盛岡市本所において、岩手県の実証試験担当農家、J A、行政機関等を含む本プロジェクト関係者、約65名の出席のもと、標記会議を開催しました。

主査である東北農研センター・氏原和人所長の挨拶に続き、東北農政局生産経営部・須賀原公泰次長、岩手県農林水産部農業普及技術課・千葉泰弘課長補佐から東北野菜園芸の情勢や本プロジェクトに対する期待等について挨拶をいただきました。さらに、東北大学農学部・金浜耕基教授から「夏秋期における四季成り性イチゴを栽培するに当たっての考え方」と題して講演をいただきました。

次に、事務局から本プロジェクトの全体説明を行いました。本プロジェクトでは、1つには、東北地方の冷涼な気候を利用して短日処理を行い、秋のできるだけ早い時期（9～10月）から収穫可能となる技術を開発します。さらに、冬を越した苗（越年苗）を使って、春のできるだけ遅い時期（7～8月）に収穫可能となる技術を開発します。また、季節に関わりなく果実ができる四季成り性という性質を持ったイチゴがありま

すが、現在のところあまりおいしいものはありません。そこで、真夏でも収穫できる高品質な四季成り性イチゴの品種改良を行い、その栽培技術を開発します。

このような研究計画に対し、外部評価委員である金浜耕基教授と秋田県立大学・高橋春實教授より、研究の背景や目的が明確であり、成功が期待できる、成果の現場への普及定着には補助金等予算面での配慮が必要である、わかりやすい普及技術とすべきである、などの意見をいただきました。

最後に、出席者からそれぞれの立場から本プロジェクトに対する抱負や問題点について発言していただき、今後5年間での本プロジェクトの成功と東北地域でのイチゴ栽培の発展を願って、関係者が一丸となって取り組むことを確認しました。

会議終了後、あいにくの雨となりましたが、盛岡市猪去の現地実証農家の佐々木一弥さんと佐々木松吉さんのイチゴハウスを訪れ、イチゴ栽培の現況や育苗方法についての視察を行いました。

イチゴの夏秋どり栽培については農家の関心も高く、本プロジェクトは今まさに始まったばかりですが、今後の研究成果にご期待いただきたいと思います。



現地視察の様子